

言っちゃナンだが、横浜の歴史は新しいのである。例の日米修好通商条約で横浜が開港したのは一八五九年だが、それからだって、まだ百年ちよっとしか経ていない。その間に不幸な戦争があつたけれど、横浜の街づくりはこれからだ。

いまさら、横浜が東京のベッドタウンと化したことを嘆いてもはじまらない。横浜に住みながら東京で働く人たちはハマツ子である。わたしたちは、そういう人たちといっしょに、この街を住みよくしていかねばならぬ。

(コラムニスト)

インターナショナル横浜

——人と人のコミュニケーションを大切に——

平野 恒 (南区 80歳)

今の子どもに開港以前の横浜村の話など興味深く話したらおもしろいと思うでしょう。

歴史はすでに百十余年過ぎて、諸外国から横浜に移ってきて現在の雙葉学院の創設者仏人修道女サンドマクチルドラクロの話や、ドイツ医師ベルツ博士、米国人へボン博士

など、それから輸出入による経済的利益、そしてその発展、あるいは当時まだ電燈もない、生きることさえ解らない貧者、病者、文盲の子どもたちのこの頃の事を若い人々に話したら、互いに愛しあう人類愛の精神や、いかなることがあっても生きることの大切さ、すばらしさを悟ってきて人間生涯の興味も湧きおこってくるのではないかとさえ思うのです。

ある日、私は洋光台の附属幼稚園の帰り、十二時半も過ぎているかと思う時、二人の母と三人の子どもに電車で乗りあわせました。「どこに行くの」と尋ねましたら、「回数券を買って鶴見に水泳の稽古に行くの、それから帰るとヴァイオリンの稽古、そして塾に行くんだよ」と子供はごく自然に答えました。一体、母と子のたのしい物語、お母さんが作ってくださったおいしい夕食は、その家庭のどこにいつてしまったのでしょうか。

かつてわが国を故郷として横浜に住み、色々の不自由を忍んで人々をよるこぼせることをしてくださった諸外国人や私共日本人など、みなそれぞれの特徴を入れて、年齢に応じてたのしみながら読みやすく、しかも美しい低廉な本を沢山出版して、子供の余暇の慰めとしたら幼児教育上に

も重要な効果をもたらすものと思うのです。たとえば、あ
る時は英文で。

幼児教育とは、学校、あるいは文字を教えたり、字を書
くことではなく人と人、家族とのコミュニケーションなど
を学ぶところに始まると思うのです。

(横浜女子短期大学 学長)

障害者地域作業所の役割

玉井 明 (旭区 29歳)

働きたい！働く喜び、働く苦しみを体いっぱい感じた
い。このことは、障害者のもつ切実な願いであり、また、
障害者が社会の中で健体者と生活をおくるうえでの接点で
あると言えよう。このような障害者、障害者をもつ親達の
願いに応えてつくられてきているのが、身体障害者地域作
業所づくりの運動である。このような作業所は、五十年七
月の調べによると、全国に三〇箇所以上もある。また、横
浜市においても、五二年度に、横浜市が助成対象として、
その実態を認めた作業所は四箇所、五四年度は、あと二
三箇所増えると言われている。なぜ、このような障害者の

ための地域作業所づくりの運動が「地域」を強調するよう
な形で行われてきたのだろうか。

六十年代から七十年代のはじめにかけての高度成長は、
福祉の分野においても近代的な大規模収容施設をつくり、
合理的に障害者問題を解決しようと考えていた。その結果、
人間は家庭であるいは、社会の中で、様々な経験をおし
て成長するものである、ということに対しての考慮、その
可能性への働きかけを施設収容という形で奪ってきた。そ
の批判と反省。また、六十年代から七十年代のはじめにか
けての大規模施設の力点が障害児に向けられ、障害者施設
の場合であるならば、短期間のリハビリテーションか一生
施設暮らしをおくるコロニーというような両極端な効率をお
もんじた合理的な福祉政策がうちたてられてきた。その中
では労働をおしての生き生きとした主体的な生への働き
かけができない状態であった。それらの状況の中で、八十
年代の中頃からはじまった数々の障害者運動の中で作られ
てきた視点——障害者も地域の中でという発想が生れ、実
践的に取り組まれてきている。しかし、地域作業所を見る
上でのもう一つの重要な視点があることを見のがしてはな
らない。それは「福祉みなおし論」の一つとしての安上り